

URA インタビュー記事

～青山学院大学 秋光純教授～

URA 鈴木 博之

前号の着任記事で予告致しました、インタビュー企画です。インタビューという形式で、物性研究に関わってきた諸先輩方に、様々な角度から、できるだけ忌憚りの無い率直なお話をお聞きしていきます。その方の研究人生についての話などは、学生や若手研究者への刺激になると思います。また、物性研究所についてのご意見なども伺い、外から見た今の物性研像を映し出すこともできればと思います。記念すべき第1回目は、青山学院大学の秋光純教授です。

014年7月29日 青山学院大学 秋光研究室にて
(写真撮影は、インタビュー後の打合せの物理学会にて)

鈴木— この度は、インタビュー企画の第1回目として、ご了承いただきありがとうございます。秋光先生には、物性研究者のお立場からだけでなく、物性研OBとして、そして長きに渡り物性研に外部から関わって頂いた方として、今後の物性研のありかたについても是非お話を頂ければと思います。

秋光— それは大変光栄です。しかし、私自身はこの頃「自分の研究」という狭い殻に閉じこもっており、物性研もほとんど訪問していないので、若干の外れなところもあるかもしれませんが、それを承知で聞いて下さい。

鈴木— 秋光先生は大学院を出られたあと、1970年からこちらの青山学院大学に移られるまでの6年間、中性子回折研究室の助手として在任されておりました。当時のことを振り返って頂きたいのですが。

秋光— 私が中性子回折の助手になった時は、丁度、中性子回折部門が新設された時で、平川、星埜の両先生が教授として、伊藤先生が助教授として着任されました。それと同時に藤井保彦氏(東京大学名誉教授)と池田宏信氏(高エネルギー物理学研究所元教授、1998年没)と私の3人が助手として着任しました。その後、佐藤正俊氏(名古屋大学名誉教授)が遅れて着任しています。その当時は、自由気ままに過ごし、助手同士で飲んでばかりいたような印象なのですが、なんとなく活気があり、澁刺としていたように思います。

この雰囲気は物性研全体にもあったと思います。例えば、当時、「土曜輪講」という主に理論の輪講がありましたが、



芳田先生と当時電総研(現産総研)におられた近藤淳先生とのお二人の先生のやりとりは、それは迫力がありました。その当時近藤効果が発表された後で、その基底状態が何かというのをさんざん議論していて、まさに熱気というのがありました。私自身はそのとき、そんな基底状態の議論は、理論の趣味みたいなものだと思っていたのですが(笑)、今から考えると勿論そんなことはなくて、どのような基底状態になるかは非常に重要な話だったのです。

このような伝統は私が青学に移った後でも続いており、福山秀敏先生らが高温超伝導に関するプレプリントを公開することにより、周囲の私たちは新しい情報を得たり、ディスカッションをするなど、物性研の拠点としての役割を果たしていこうという気概と雰囲気があったように覚えています。その当時の印象が強い私には、今の物性研は外への発信が少し足りないように思います。勿論、これは時代状況もありますし、物性研の役割も変わってきておりますので、一概に比較するべきことでは無いのかもしれませんが。

根性×運」だと、学生に良く言います。どれか1つでもゼロだと結果もゼロということになります。皆さんと話をすると、多くの方が各人のアイデアに基づいてこっそり(?)作られているようですが、やはりある程度本気になってやる必要があると思っています。



鈴木— なるほど、私も日本は世界的に見ても、その点については恵まれた状況にいると思います。また、色々、名言・格言もありがとうございました。

話しは変わりますが、物性研の50周年のときの記念講演では夏目漱石の言葉として、「維新の志士のような気概でやってほしい」ということを話されていましたよね。それから古典主義と浪漫主義のお話も。そのときは試料作成には浪漫主義であって欲しいとのことでしたが。

秋光— そうですね、ただ、理論家にも浪漫主義が欲しいですね。マルクスは「哲学者は解釈することばかりでは駄目だ、世の中を変革することをしないと駄目だ」と言いました。理論家も与えられたものを解釈することばかりでは駄目だと思います。変革することをつくるという意味では、次元が全く違うことですが試料作成と理論が浪漫主義であって欲しいですね。理論家たちが自分たちで壁を越えていく雰囲気が欲しいですね。

勿論、理論が主導するか実験が主導するかは時と場合によります。実験で理解できないことが出て理論が飛びついたり、「トポロジカル絶縁体」のように理論が出されそれによって実験もどんどん出るなど、理論と実験が手を携えて進むことが必要です。いずれにしろ、理論が突出するか、実験が突出するかは、そのときの雰囲気やその人の実力にもよりますが、そういうところには熱気が出てきますよね。物性研には、そういう熱気を中心に居て貰いたいです。

鈴木— 先生は今後とも研究を続けられると聞きましたが、今後の目標をお聞かせください。

秋光— 今後は是非続けたいテーマは2つあります。1つは新しいタイプの超伝導体の探索であり、他の1つはchiralな対称性を持つ磁性体や超伝導体の発見です。実はこれらは「異なる物理」のように思われますが「スピン-軌道相互作用」が強い系という共通項を持っています。これらはいずれも“はやりそうな気配”を見せておりましたが、まだ理論的には統一的な見方は無いようです。

鈴木— さて、これまでも所々に物性研に期待するコメントを頂きましたが、最後にそのあたりについてお聞きしたいと思います。最初のお話の中で出てきましたが、以前の物性研と比べて外に発信がされていないと感じられるとのことですが。

秋光— そうですね、この外への発信というのは、拠点としての役割としては重要なことで、それはつまり物性コミュニティの中心に居るんだという意識の表れだと思います。では、どうして発信されていないのかと考えると、勿論、色々なことがあります。例えば、根本的に物性研内部でのお互いのコミュニケーションが十分とれていないのではないかと、また、外部との交わりも少なくなっているのではないかと思います。

これらの点については、仕方のないことですが物性研は移転に伴ってハンデを背負ってしまったことがあります。移転前はまさに街の真ん中にあり、人がすぐに集まる環境にありました。柏に移って、言い方は悪いですが、田舎に引っ越して家は立派になり、つまり装置は立派になったのですが、人が集まるセンターとしての好条件を失ってしまいました。また、建物の構造自体が人の集まる構造になっていないのも、お互いのコミュニケーションをとるのにマイナスとなっているのは、物性研内外で漏れ聞くところですが、勿論、そんなことを言っていられない訳ですが、その中で最近、I ♥ caffe というコアタイムを作り、人が集まり、コミュニケーションをとる工夫を凝らしているのは、地味な活動ですが素晴らしいことで、まずは、物性研内部でのコミュニケーションを充実させることが第一歩だと思っています。

また、以前と違う環境としては、年々評価が厳しくなってきた中で物性物理という分野の難しさが挙げられます。宇宙や素粒子の分野では、人々に夢やロマンを感じさ



